

道楽と職業

夏目漱石

青空文庫

ただいまは牧君の満洲問題——満洲の過去と満洲の未来という
ような問題について、大変条理の明かな、そうして秩序のよい演
説がありました。そこで牧君の披露に依ると、そのあとへ出る私
は一段と面白い話をするというようになってはいるが、なかなか牧
君のように旨くうまできません。ことに秩序が無かろうと思う。ただ
いま本社の人が明日の新聞に出すんだから、講演の梗概こうがいを二十
行ばかりにつづめて書けという注文でしたが、それは書けないと
言つて断つたくらいです。それじゃアしやべらないかというと、
現にこうやってしやべりつつある。しやべる事はあるのですが、
秩序とか何とかいう事が、ハッキリ句切りくぎがついて頭に畳み込ん

でありませぬから、あるいは前後したり、混雑したり、いろいろお聴きにくいところがあるだろうと思います。ことにあなた方の頭も大分^{つか}労れておいででしょうから、まずなるべく短かく申そうと思う。

私の申すのは少しもむずかしいことはありません。満洲とか安南とかいう対外問題とは違つて極^{ごく}やさしい「道楽と職業」という至極^{しごく}簡単なみだしです。内容も従つて簡単なものであります。まあそれをちよつとわずかばかり御話をしようと思う。

元来こんな所へ来て講演をしようなどとは全く思いもよらぬことでありましたが、「是非出て来い」とこういう訳で、それでは何か問題を考えなければならぬからその問題を考える時間を与え

てくれと言いましたら、社の方では宜よろしいと云つて相応にっしの日子にを
与えてくれました。ですから考えて来ないということも言えず、
出て来ないということも無論言えず、それでとうとうここへ現わ
れる事になりました。けれども明石あかしという所は、海水浴をやる土
地とは知っていました。が、演説をやる所とは、昨夜到着するまで
も知りませんでした。どうしてああいう所で講演会を開くつもり
か、ちよつとその意を得るに苦しんだくらいであります。ところ
が来て見ると非常に大きな建物があつて、あそこで講演をやるの
だと人から教えられて始めてもつともだと思いました。なるほど
あれほどの建物を造ればその中で講演をする人をどこからか呼ば
なければいわゆる宝の持腐れになるばかりでありましょう。した

がつて西日がカンカン照って暑くはあるが、せつかくの建物に對しても、あなた方は来て見る必要があり、また我々は講演をする義務があるとしても言おうか、まアあるものとしてこの壇上に立つた訳である。

そこで「道楽と職業」という題。道楽と云いますと、悪い意味に取るとお酒を飲んだり、または何か花柳社会へ入ったりする、俗に道楽息子と云いますね、ああいう息子のする仕業しわざ、それを形容して道楽という。けれども私のここで云う道楽は、そんな狭い意味で使うのではない、もう少し広く応用の利きく道楽である。善よい意味、善い意味の道楽という字が使えるか使えないか、それは知りませぬが、だんだん話して行く中うちに分るだろうと思う。もし

使えなかつたら悪い意味にすればそれでよいのであります。

道楽と職業、一方に道楽という字を置いて、一方に職業という字を置いたのは、ちようど東と西というようなもので、南北あるいは水火、つまり道楽と職業が相闘うところを話そうと、こういう訳である。すなわち道楽と職業というものは、どういうように関係して、どういうように食い違っているかということをまず話して——もつともその道楽も職業も、すでに御承知のあなた方にならう。そういう事を言う必要もなし、私も強^しいてやりたくはないが、しかし前申^{ぜん}したような訳でわざわざ出て来たものだから、そこはあなた方にすでに御分りになつている程度以上に、一步でももう少し明かに分らせることが、私の力でできればそれで私の役目は済

んだものと内々たかを括くくつているのであります。

それで我々は一口によく職業と云いますが、私この間も人に話したのですが、日本に今職業が何種類あつて、それが昔に比べてどのくらいの数に殖ふえているかということを知っている人は、おそらく無いだろうと思う。現今の世の中では職業の数は煩はんざつ雑ざつになつてゐる。私はかつて大学に職業学という講座を設けてはどうかということ考えた事がある。建議しやませぬが、ただ考えたことがあるのです。なぜだというと、多くの学生が大学を出る。最高等の教育の府を出る。もちろん天下の秀才が出るものと仮定しまして、そうしてその秀才が出てから何をしているかというのと、何か糊口ここうの口がないか何か生活の手蔓てづるはないかと朝から晩まで搜

して歩いている。天下の秀才を何かないか何かないかと血ちまなこ眼こに
させて遊ばせておくのは不経済の話で、一日遊ばせておけば一日
の損である。二日遊ばせておけば二日の損である。ことに昨今の
ように米価の高い時はなおさらの損である。一日も早く職業を与
えれば、父兄も安心するし当人も安心する。国家社会もそれだけ
利益を受ける。それで四方八方良いことだらけになるのであるけ
れども、その秀才が夢中に奔走して、汗をダラダラ垂らしながら
捜しているにもかかわらず、いわゆる職業というものがあまり無
いようです。あまりどころかなかなか無い。今言う通り天下に職
業の種類が何百種何千種あるか分らないくらい分布配列されてい
るにかかわらず、どこへでも融通きが利くべきはずの秀才が懸命に

馳^かけ廻っているにもかかわらず、自分の生命を託すべき職業がなかなか無い。三箇月も四箇月も遊んでいる人があるのでこれは気の毒だと思うと、豈^{あにはか}計らんやすでに一年も二年もボンヤリして下宿に入つてなすこともなく暮しているものがある。現に私の知つている者のうちで、一年以上も下宿に立て籠^{こも}つて、いまだに下宿料を一文も払わないで茫^{ぼうぜん}然としている男がある。もつとも下宿の方でも信用しているから貸しておくし、当人もどうかなるだろうと思つて安心はしているらしいが国家の経済からいうとずいぶん馬鹿氣た話であります。私も多少知つている間^{あいだから}柄だから気の毒に思つて、職業は無いか職業は無いかぐらい人に尋ねて見ることが、どこにもそう云う口が転がっていないので残念ながらまだ

そのままになっていきます。けれども今言う通り職業の種類が何百通りもあるのだから、理窟りくつから云えばどこかへぶつかってしかるべきはずだと思うのです。ちようど嫁を貰うようなもので自分の嫁はどこかにあるにきまつてるし、また向うでも捜しているのは明らかかな話しだが、つい旨うまく行かないといつまでも結婚が後れてしまう。それと同じでいくら秀才でも職業にぶつからなければしようがないのでしよう。だから大学に職業学という講座があつて、職業は学理的にどういうように発展するものである。またどういふ時世にはどんな職業が自然の進化の原則として出て来るものである。と一々明細に説明してやつて、例えば東京市の地図が牛込区とか小石川区とか何区とかハッキリ分つてるように、職業の分

化発展の意味も区域も盛衰も一目の下に瞭然りようぜんえとく会得できるような仕かけにして、そうして自分の好きな所へ飛び込ましたらまことに便利じゃないかと思う。まあこれは空想です。実際やって見ないから分らぬが、恐らくできますまい。できたらよかろうと思うだけです。非常に経済なことにはなるでしょう。

こんな考を起すほどに私は今の日本に職業が非常にたくさんあるし、またその職業が混乱錯雑しているように思うのです。現にこの間も往来を通つたら妙な商売がありました。それは家とか土蔵とかを引きずって行くという商売なんだから私は驚いたのであります。この公会堂をこのまま他の場所へ持つて行くという商売です。いくら東京に市区改正が激しく行われたって、そう毎年建

てたばかりの家の位置を動かさなければならぬというように変化していやアしない。現に私の家などは建った時から今日まで市区改正に掛らずにいる。ほよど辺鄙へんぴな所にあるのだからでしょう。けれどもたとい繁華はんかな所にいたって、そう始しじゆう終家を引ツ張ツてツて貰わなければならぬという人はない。しかるにそれを専門に商売にしている者があるから、東京は広いと思つたのです。馬琴の小説には耳の垢あか取り長官とか云う人がいますが、他の耳ひと垢みみあかを取る事を職業にでもしていたのでしょうか。西洋には爪きらいを綺麗に掃除したり恰好かっこうをよくするという商売があります。近頃日本でも美顔術といつて顔の垢を吸出して見たり、クリームを塗抹とまつして見たりいろいろの化粧をしてくれる専門家が出て来ましたが、あ

あいう商売はおそらく昔はないのでしよう。今日のように職業が芋いもの蔓つるみたようにそれからそれへと延びて行っているいろいろ種類が殖ふえなければ、美顔術などという細かな商売は存在ができなからうと思う。もつとも昔はかえって今にない商売がありました。私の幼少の時は「柳の虫や 赤あか蛙がえる」などと云つて売りに来た。何にしたものか今はただ売声だけ覚えています。それから「いたずらものはいないかな」と云つて、旗を担かついで往来を歩いて来たのもありました。子供の時分ですからその声を聞くと、ホラ来たと云つて逃げたものである。よくよく聞いて見ると鼠ねずみ取りの薬を売りに来たのだそうです。鼠のいたずらもので人間のいたずらものではないというのでやっと安心したくらいのものである。そん

な妙な商売は近頃とんと無くなりましたが、しめくく締括った総体の高
 から云えば、どうも今日の方が職業というものはよほど多いだろ
 うと思う。単に職業に変化があるばかりでなく、細かくなってい
 る。現に唐物屋とうぶつやというものはこの間まで何でも売っていた。襟
 とか襟飾りとかあるいはズボン下、靴足袋くつたび、傘かさ、靴、たいていな
 ものがありました。身体からだへつけるいつさいの舶来品を売っていた
 と云つても差さしつかえ支かえない。ところが近頃になるとそれが變つてシ
 ャツ屋はシャツ屋の専門ができる、傘屋は傘屋、靴屋は靴屋とち
 やんと分れてしまいました。靴足袋屋……これはまだ専門はでき
 ないようだが、今にできるだろうと思います。現に日本の足袋屋
 は専門になっています。十文のをくれと云えば十文のをくれる、

十一文のをくれろと云えば十一文のをくれる。私が演説を頼まれて即席に引受けないのは、足袋屋みたいにちよつと出来合いがないからです。どうか十文の講演をやってくれ、あそこは十一文甲^こうだか高の講演でなければ困るなどと注文される。そのくらいに私が演説の専門家になっていれば訳はありませんが私の御手際^{おてぎわ}はそれほど専門的に発達していない。素^{しろ}人が義理に東京からわざわざ明石辺までやって来るといふくらいの話でありますから、なかなかそう旨^{うま}くはいきませぬ。足袋屋はさておいて食物屋^{たべものや}の方でもチヤンとした専門家があります。例えば牛肉も鳥の肉も食わせる所があるかと思うと、牛肉ばかりの家^{うち}があるし、また鳥の肉でなければ食わせないという家もある。あるいはそれが一段細かくな

つて家あいがも鴨よりほかに食わせない店もある。しまいには鳥の爪だけ食わせる所とか牛の肝臓だけ料理する家ができるかも知れない。分れて行けばどこまで行くか分りません。こんなに劇はげしい世間だからしまいには大変なことになるだろうと思う。とにかく職業は開化が進むにつれて非常に多くなっていることが驚くばかり眼につくようです。ところがこれは当り前のことで学問の研究の上から世の中の変化とでも云いましょうか、漠ぼくぜん然たる社会の傾向とでも云いましょうか、必然の勢そういうように割れて細かになつて来るのであります。これは何も私の発明した事実でも何でもない、昔から人の言っていることでもあります。昔の職業というものは大まかで、何でも含んでいる。ちようど田舎いなかの呉服屋みたいに、

反物を売っているかと思うと傘を売っておったり油も売るといふ、何屋だか分らぬ万事いっさいを売る家というようなものであつたのが、だんだん専門的に傾いていろいろに分れる末はほとんど想像がつかないところまで細かに延びて行くのが一般の有様と行つて差支ないでしょう。

ところでこの事実をずっと想像に訴えて遠い過去さかのぼに溯つたらどうなるでしょう。あるいは想像でも溯れないかも知れないけれども、この事実の中うちに含まれている論理の力で後ろの方へ逆行したらどんなものでしょう。今言う通り昔は商売というものの数が少なかつた。職業の数が少なくつて、世間の人もそのわずかな商売をもつて満足しておつたという訳なのだから、あるいは傘かさを買い

に行っても傘がない、衣物きものを買いに行っても衣物がないという時代がないとも限らない。私はかつて熊本にりましたが、或る時はいふき灰吹を買いに行つたことがある。ところが灰吹はないと云う。熊本中どこを尋ねても無いかと云つたら無いだろうと云う。じゃ熊本では煙草たばこを喫のまないか痰たんを吐かないかという現に煙草を喫のんでいる。それでは灰吹はどうするんだと聞くと、裏の藪やぶへ行つて竹を伐きつて来て拵こしらえるんだと教えてくれました。裏の藪から伐つて来て、青竹の灰吹で間に合あわしておけばよいと思つているところでは灰吹は売れない訳である。したがって売つてゐるはずがないのである。そういう風に自分で人の厄介やくがいにならずに裏の藪へ行つて竹を伐つて灰吹を造るごとく、人のお世話にならないで自

分の身の困りまわをなるべく多く足す、また足さなければならぬ時代があつたものでしよう。さてその事実を極端まで辿たどつて行くと、いつさい万事自分の生活に關した事は衣食住ともいかなる方面にせよ人のお蔭かげを被こうむらないで、自分だけで用を弁じておつた時期があり得るといふ推測になる。人間がたつた一人で世の中に存在しているといふことは、ほとんど想像もできないかも知れないし、またそこまで論理を頼りに推詰めて考える必要もない話ですが、そこまで行かないとちよつと講話にならないから、まあそうしておくのです。すなわち誰のお世話にもならないで人間が存在していたといふ時代を思い浮べて見る。例えば私がこの着物を自分で織えりつて、この襟えりを自分で拵こしらへて、総すべて自分だけで用を弁じて、何

も人のお世話にならないという時期があつたとする。また有つたとしてもよいでしょう。そういう時期が何時かあつたらどうする
という意味ではないが、まああると仮定して御覧なさい。そうし
たらそういう時期こそ本当の独立独行という言葉の適当に使える
時期じゃないでしょうか。人から月給を貰う心配もなければ朝起
きて人にお早うと言わなければ機嫌きげんが悪いという苦勞もない。生
活上寸毫すんごうも人の厄介にならずに暮して行くのだから平気なもの
である。人にすくなくとも迷惑をかけないし、また人にいささか
の恩義も受けないで済むのだから、これほど都合の好いことはな
い。そういう人が本当の意味で独立した人間といわなければなら
ないでしょう。実際我々は時勢の必要上そうは行かないようなも

のの腹の中では人の世話にならないでどこまでも一本立でやって行きたいと思つていふのだからつまりはこんな太古の人を一面には理想として生きているのである。けれども事実やむをえない、仕方がないからまず衣物を着る時には呉服屋の厄介になり、お菜さいを拵える時には豆腐屋の厄介になる。米も自分で搗つくよりも人の搗いたのを買うということになる。その代りに自分は自分で米を搗き自分で着物を織ると同程度の或る専門的の事を人に向つてしつつかあるという訳になる。私はいまだかつて衣物を織つたこともなければ、靴足袋くつたびを縫つたこともないけれども、自ら縫わぬ靴足袋、あるいは自ら織らぬ衣物の代りに、新聞へ下らぬ事を書くとか、あるいはこういう所へ出て来てお話をするとかして埋合せを

つけているのです。私ばかりじゃない、誰でもそうです。するとこの一歩専門的になるというのはほかの意味でも何でもない、すなわち自分の力に余りある所、すなわち人よりも自分が一段と抽^{ぬき}んでている点に向つて人よりも仕事を一倍にして、その一倍の報酬に自分に不足した所を人から自分に仕向けて貰つて相互の平均を保ちつつ生活を持続するという事に帰着する訳であります。それを極^{ごく}むずかしい形式に現わすというと、自分のためにする事はすなわち人のためにすることだという哲理をほのめかしたような文句になる。これでもまだちよつと分らないなら、それをもつと数学的に言い現わしますと、己のためにする仕事の分量は人のためにする仕事の分量と同じであるという方程式が立つのでありま

す。人のためにする分量すなわち己のためにする分量であるから、人のためにする分量が少なければ少ないほど自分のためにはならない結果を生ずるのは自然の理であります。これに反して人のためになる仕事を余計すればするほど、それだけ己のためになるのもまた明かな因縁いんねんであります。この関係を最も簡単にかつ明めいり瞭ように現わしているのは金ですな。つまり私が月給を拾五円なら拾五円取ると、拾五円方人がたのために尽しているという訳で取りも直さずその拾五円が私の人に対して為し得る仕事の分量を示す符ふちょう丁ちようになっています。拾五円方人に対する労力を費す、そうして拾五円現金で入ればすなわちその拾五円は己のためになる拾五円に過ぎない。同じ訳で人のためにも千円の働きができれば、己の

ために千円使うことができるのだから誠に結構なことで、諸君もなるべく精出せいだして人のためにお働きになればなるほど、自分にもますます贅ぜいたく沢たくのできる余裕を御作りになると変りはないから、なるべく人のために働く分別をなさるが宜しかろうと思う。

もつとも自分のためになると云つてもためになり方はいろいろある。第一その中うちから税などを払わなければならない。税を出して人に月給をやったり、巡查を雇つておいたり、あるいは國務大臣を馬車に乗せてやったりする。もつとも一人じゃアこれだけの事はできません、我々大勢で金を出してやるのですが、ひつきよう畢ひ 竟きようずるにあの税などもやはり自分のために出すのです。國務大臣が馬車や自動車に乗って怪けしからんと言つたつてそれは野暮の云う

事です。我々が税を出して乗らしておいてやるので国務大臣のためじゃない、つまり己のためだと思えば間違はない。だから時々自動車ぐらい借りに行ってもよかろうと思う。税はそのくらいにしてこのほか己のためにするものは衣食住と他の贅沢費になります。それを合算すると、つまり銀行の帳簿のように収入と支出と平均します。すなわち人のためにする仕事の分量は取りも直さず己のためにする仕事の分量という方程式がちやんと数字の上に現われて参ります。もつとも吝けちで蓄ためている奴やつがあるかも知れないが、これは例外である。例外であるが蓄めていればそれだけの労力というものを後あとへ繰くり越こすのだから、やはり同じ理窟りくつになります。よくあいつは遊んでいて憎にくらしいとかまたはごろごろしていて羨うらや

ましいとか金持の評判をするようですが、そもそも人間は遊んでいて食える訳のものではない。遊んでいるように見えるのは懐ふところにある金が働いてくれているからのことで、その金というものは人のためにする事なしにただ遊んでいてできたものではない。親父おやじが額に汗を出した記念だとかあるいは婆さんの臍へそくり繰だとか中には因縁いんねん付きの悪い金もありましようけれども、とにかく何らか人のためにした符ふちよう徴、人のためにしてやったその報酬というものが、つまり自分の金になって、そうして自分はそのお蔭かげでもって懐ふところ手をして遊んでいられるという訳でしょう。職業の性質というものはまあざっとこんなものです。

そこでネ、人のためにするという意味を間違えてはいけません

よ。人を教育するとか導くとか精神的にまた道義的に働きかけてその人のためになるという事だと解釈されるとちよつと困るのです。人のためにというのは、人の言うがままにとか、欲するがままにといういわゆる卑俗の意味で、もつと手短かに述べれば人の御機嫌ごきげんを取ればというくらいさしつかえの事に過ぎんです。人にお世辞を使えばと云い変えても差支さしつかえなくらいのものです。だから御覧なさい。世の中には徳義的に觀察するとずいぶん怪けしからぬと思うような職業とせいがありません。しかもその怪しからぬと思うような職業を渡世とせいにしている奴は我々よりはよつぽどえらい生活をしているのがあります。しかし一面から云えば怪しからぬにせよ、道徳問題として見れば不埒ふらちにもせよ、事実の上から云えば最も人

のためになることをしているから、それがまた最も己のためになつて、最も贅沢ぜいたくを極きわめていると言わなければならぬのです。道徳問題じゃない、事実問題である。現に芸妓げいしやというようなものは、私はあまり関係しないからして精くわしいことは知らんけれどもとにかく一流の芸妓とか何とかなるとちよつと指環を買うのでも千円とか五百円という高価なものの中から撰よりどり取をして余裕があるように見える。私は今ここにニツケルの時計しか持つておらぬ。高尚な意味で云つたら芸妓よりも私の方が人のためにする事が多くはないだろうかという疑もあるが、どうも芸妓ほど人の氣に入らない事もまたたしからしい。つまり芸妓は有徳な人だからああ云う贅沢ができる、いくら学問があつても徳の無い人間、人に好

かれない人間というものは、ニツケルの時計ぐらい持つて我慢しているよりほか仕方がないという結論に落ちて来る。だから私のいう人のためにするという意味は、一般の人の弱点嗜好しこうに投ずると云う大きな意味で、小さい道徳——道徳は小さくありませんが、まず事実の一部分に過ぎないのだから小さいと云つても差さ支つかえないでしょう。そう云う高尚ではあるが偏狭な意味で人のためにするというのはなく、天然の事実そのものを引きくるめて何でもかでも人に歓迎されるという意味の「ためにする」仕事を指したのであります。

そこで職業上における己のため人のためと云う事は以上のように御記憶を願つておいて、話がまた後戻りをする恐れがあるかも

知れないが、前申ぜんした通り人文発達の順序として職業が大変割れて細かくなると妙な結果を我々に与えるものだからその結果を一口御話をして、そうして先へ進みたいと思います。私の見るところによると職業の分化錯さくそう綜から我々の受ける影響は種々あります。しようが、そのうちに見逃す事のできない一種妙な者があります。というのはほかでもないが開化の潮流が進めば進むほど、また職業の性質が分れば分れるほど、我々は片輪かたわな人間になってしまふという妙な現象が起るのであります。言い換えると自分の商売がしだいに専門的に傾かたむいてくる上に、生存競争のために、人一倍の仕事で済んだものが二倍三倍乃至四倍ないしとだんだん速力を早めておいつかなければならないから、その方だけに時間と根気を費し

がちであると同時に、お隣りの事や一軒おいたお隣りの事が皆かいつも目分くらなくなってしまうのであります。こういうように人間が千筋も万筋もある職業線の上のただ一線しか往来しないで済むようになり、また他の線へ移る余裕がなくなるのはつまり吾人の社会的知識が狭く細く切りつめられるので、あたかも自ら好んで不具になると同じ結果だから、大きく云えば現代の文明は完全な人間を日に日に片輪者に打崩うちくずしつつ進むのだと評しても差支ないのであります。極ごくの野蛮時代で人のお世話には全くならず、自分で身まに纏まとうものを捜し出し、自分で井戸を掘って水を飲み、また自分で木の実か何かを拾って食って、不自由なく、不足なく、不足があるにしても苦しい顔もせずに我慢をしていれば、それこそ

万事人に待つところなき点において、また生活上の知識をいっさい自分に備えたる点において完全な人間と云わなければなりません。ところが今の社会では人のお世話にならないで、一人前に暮らしているものはどこをどう尋ねたって一人もない。この意味からして皆不完全なものばかりである。のみならず自分の専門は、日に月に、年には無論のこと、ただ狭く細くなつて行きさえすればそれですむのである。ちょうど針はりで掘ほりぬき抜井戸を作るとでも形容してしかるべき有様になつて行くばかりです。何商売を例に取つても説明はできますが、この状態を最もよく証明しているものは専門学者などだろうと思います。昔の学者はすべての知識を自分一人で背負しよつて立つたように見えますが、今の学者は自分の研

究以外には何も知らない私が前ぜん申した意味の不具そろが揃そろっているの
であります。私のような者でも世間ではたまに学者扱とらにしてくれ
ますが、そうするとやっぱり不具そろの一人であります。なるほど私
などは不具そろに違ちがない、どうもすくなくとも普通のことことを知らない。
区役所へ出す転居届てんきうの書き方も分わらなければ、地面じめんを売うるにはど
んな手続ていじをしていいかささえ分わらない。綿わたは綿わたの木きのどんな所ところをど
うして拵こしらえるかかも解とし得えない。玉子豆腐たまごどうふはどうしてできるかこれ
また不明ふめいである。食たうことことは知しっているが拵こしらえる事ことは全ぜんく知しらな
い。その他味淋みりんにしろ、醤油しょうゆにしろ、なんにしろかかにしろすべ
て知らないことだらけである。知識ちしきの上うへにおいて非常ひじょうな不具そろと云いわ
なければなりません。けれどもすべてを知らない代しろりに一いっ力りき所ところ

か二カ所人より知っていることがある。そうして生活の時間をただその方面にばかり使ったものだから、完全な人間をますます遠ざかって、実に突飛なものになり終おせてしまいました。私ばかりではない、かの博士とか何とか云うものも同様であります。あなた方は博士と云うと諸事万端人間いつさい天地宇宙の事を皆知っているように思うかも知れないが全くその反対で、実は不具の不具の最も不具な発達を遂げたものが博士になるのです。それだから私は博士を断りました。しかしあなた方は——手を叩たたいたつて駄目です。現に博士という名にごまかされているのだから駄目です。例えば明石あかしなら明石に医学博士が開業する、片方に医学士があるとすると。そうすると医学博士の方へ行くでしょう。いくら手

を叩いたって仕方がない、ごまかされるのです。内情を御話すれば博士の研究の多くは針の先きで井戸を掘るような仕事をするのです。深いことは深い。掘抜きだから深いことは深いが、いかにせん面積が非常に狭い。それを世間ではすべての方面に深い研究を積んだもの、全体の知識が万遍なく行き渡っていると誤解して信用をおきすぎなのです。現に博士論文と云うのを見ると存外細かな題目を捕えて、自分以外には興味もなければ知識もないような事項を穿鑿せんさくしているのが大分あるらしく思われます。ところが世間に向つてはただ医学博士、文学博士、法学博士として通っているからあたかも総すべての知識をもっているかのように解釈される。あれは文部省が悪いのかも知れない。虎列刺コレラ病博士とか腸窒ちよう

チフス
扶斯博士とか赤痢博士とかもつと判然と領分を明らかにした方が
善くはないかと思う。肺病患者が赤痢の論文を出して博士になつ
た医者さしつかえの所へ行つたつて差支はないが、その人に博士たる名
譽を与えたのは肺病とは没交渉の赤痢であつて見れば、単に博士
の名で肺病を担かつぎ込んでかんちがい勘違いになるかも知れない。博士の
事はそのくらいにしてただ以上をかい撮つまんで云うと、吾人は開化
の潮流に押し流されて日に日に不具になりつつあるということだ
けは確かでしょう。それをほかの言葉でいうと自分一人ではとて
も生きていられない人間になりつつあるのである。自分の専門に
していることにかけては、不具的に非常に深いかも知れぬが、そ
の代り一般的の事物については、大變に知識が欠乏した妙な変人

ばかりできつつあるという意味です。

私は職業上己のためとか人のためとか云う言葉から出立してその先へ進むはずのところをツイわき道へそれて職業上の片輪かたわという事を御話しし出したから、ついでにその片輪の所置について一言申上げて、また己のため人のための本論に立ち帰りたい。順序の乱れるのは口に駆かられる講演の常として御許ごこしを願います。

そこで世の中では——ことに昔の道德観むかしかたぎや昔堅むかしかたぎ気の親の意見やまたは一般世間の信用などから云いますと、あの人は家業に精を出す、感心だと云って賞ほめそやします。いわゆる家業に精を出す感心な人というのは取とりも直なおさず真黒になつて働いている一般的の知識の欠乏した人間に過ぎないのだから面白い。露骨に云えば

自ら進んで不具になるような人間を世の中では賞^ほめているのです。それはとにかくとして現今のように各自の職業が細く深くなつて知識や興味の面積が日に日に狭^{せば}められて行くならば、吾人は表面上社会的共同生活を営んでいるとは申しながら、その実銘^{めいめい}々孤立して山の中に立て籠^{こも}つてしていると一般で、隣り合せに居^{きよ}を卜^{ぼく}していながら心は天^{てん}涯^{がい}にかけ離れて暮しているとしても評するよりほかに仕方がない有様に陥^{おちい}つて来ます。これでは相互を了解する知識も同情も起りようがなく、せつかくかたまつて生きていても内部の生活はむしろバラバラで何の連鎖もない。ちようど乾涸^{ひから}びた糲^{ほしい}のようなもので一^{ひとつぶ}粒一粒に孤立しているのだから根ツから面白くないでしょう。人間の職業が専門的になつてまた各々自分の

専門に頭を突込んで少しでも外面を見渡す余裕がなくなると当面の事以外は何も分らなくなる。また分らせようという興味も出て来にくい。それで差さしつかえ支かえないと云えばそれまでであるが、現に家業にはいくら精通してもまたいくら勉強してもそればかりじゃどこか不足な訴が内部から萌きざして来て何となく充分に人間的な心持が味えないのだからやむをえない。したがってこの孤立支離の弊を何とかして矯ためなければならなくなる。それを矯める方法も御話しするためにはわざわざこの壇上に現われたのではないから詳くわしい事は述べませんが、また述べるにしたところで大体はすでに諸君も御承知の事であるが、まあ物のついでだから一言それに触れておきましょう。すでに個々介立の弊が相互の知識の欠乏と同

情の稀薄きはくから起つたとすれば、我々は自分の家業商売に逐おわれて
 日もまた足らぬ時間しかもたない身分であるにもかかわらず、そ
 の乏しい余裕を割さいて一般の人間を広く了りようかい解かいしましたこれに同
 情し得る程度に互の温あたたかみ味かちを醸かもす法を講じなければならぬ。
 それにはこういう公会堂のようなものを作つて時々講演者などを
 聘へいして知識上の啓けい発はつをはかるのも便法でありますし、またそう
 知的の方面ばかりでは窮屈きうくつすぎるから、いわゆる社交機関を利用
 して、互の歓情くわんじやうを罄つきすのも良法でありましょう。時としては方便
 の道具として酒や女を用いても好いくらいのものでしよう。実業
 家などがむずかしい相談をするのかえつて見けんとうちがい当ちがい違ちがいの待合な
 どで落合つて要領を得ているのも、全く酒色という人間の窮屈きうくつを

融かし合う機械の具そなわつた場所で、その影響の下に、角かどの取れた同情のある人間らしい心持で相互に所置ができるからだろうと思ひます。現に事が纏まとまるといふ実用上の言葉が人間として彼我ひが打ち解けた非実用の快感状態から出立しなければならぬのも分りましよう。こういうと私が酒や女をむやみに推薦するようぢよつとおかしいが、私の申上げる主意はたとい弊害の多い酒や女や待合などが交際の機関として上流の人に用いられるのでも、人間は個々別々に孤立して互の融和同情を眼中に置かず、ただ自家専門の職業にのみ腐心してはいられないものだという例に御話したくらしいのもであります。本来を云うと私はそういう社交機関よりも、諸君が本業に費やす時間以外の余裕を挙あげて文学書を御読み

にならん事を希望するのであります。これは我が田へ水を引くよ
うな議論にも見えますが、元来文学上の書物は専門的の述作では
ない、多く一般の人間に共通な点について批評なり叙述なり試み
た者であるから、職業のいかんにかかわらず、階級のいかんにか
かわらず赤裸々せきららの人間を赤裸々に結びつけて、そうしてすべての
他のしょうへき 墻壁を打破する者でありますから、吾人が人間として相
互に結びつくためには最も立派でまた最も弊の少ない機関だと思
われるのです。少くとも芸妓を上げて酒を飲んだと同等以上の効
果がありそうに思われるのであります。あなた方もこういう公会
堂へわざわざこの暑いのに集まって、私のような者の言うことを
黙って聴くような勇氣があるのだから、そういう楽な時間を利用

して少し御読みになつたらいかだらうと申したいのです。職業が細かくなりまた忙がしくなる結果我々が不具になるが、それはどうしてきようせい矯正するかという問題はまずこのくらいにして、この講演の冒頭に述べた己のためとか人のためとかいう議論に立ち歸つてその約つづまりをつけてこの講演を結びたいと思います。

それで前申した己のためにするとか人のためにするとかいう見地からして職業を観察すると、職業というものは要するに人のためにするものだという事に、どうしても根本義を置かなければなりません。人のためにする結果が己のためになるのだから、元はどうしても他人本位である。すでに他人本位であるからには種類の選択分量の多少すべて他をめやす目安にして働かなければならない。

要するに取捨興廢の權威共に自己の手中にはない事になる。したがって自分が最上と思う製作を世間に勧め^{すす}て世間はいつこう顧み^{かえり}なかつたり自分は心持が好くないので休みたくても世間は平日のごとく要求を恣^{ほしいまま}にしたりすべて己を曲げて人に従わなくては商売にはならない。この自己を曲げるといふ事は成功には大切であるが心理的にははなはだ厭^{いや}なものである。就^{なかんずく}中最も厭^{いや}なものはどんな好きな道でもある程度以上に強^しいられてその性質がしだいに嫌悪^{けんお}に変化する時にある。ところが職業とか専門とかいうものは前申^{ぜん}す通り自分の需用以上その方面に働いてそうしてその自分に不要な部分を挙^あげて他の使用に供するのが目的であるから、自己を本位にして云えば当初から不必要でもあり、厭^{いや}でもある事を強^し

いてやるという意味である。よく人が商売となると何でも厭になるものだと云いますがその厭になる理由は全くこれがためなのです。いやしくも道楽である間は自分に勝手な仕事を自分の適宜な分量でやるのだから面白いに違ないが、その道楽が職業と変化する刹那せつなに今まで自己にあつた權威が突然他人の手に移るから快樂がたちまち苦痛になるのはやむをえない。打ち明けた御話が己のためにすればこそ好なので人のためにしなければならぬ義務を括くくりつけられればどうしたって面白くは行かないにきまつています。元来己を捨てるということとは、道德から云えばやむをえず不徳も犯そうし、知識から云えば己の程度を下げて無知な事も云おうし、人情から云えば己の義理を低くして阿漕あこぎな仕打もしようし、

趣味から云えば己の芸術眼を下げて下劣な好尚に投じようし、十中八九の場合悪い方に傾きやすいから困るのである。例えば新聞を^{こしら}え拵えてみても、あまり下品な事は書かない方がよいと思ひながら、すでに商売であれば販売の形勢から考え營業の成立するくらいには俗衆の御^ご機嫌^{きげん}を取らなければ立ち行かない。要するに職業と名のつく以上は趣味でも徳義でも知識でもすべて一般社会が本尊になって自分はこの本尊の鼻息を伺つて生活するのが自然の理である。

ただここにどうしても他人本位では成立たない職業があります。それは科学者哲学者もしくは芸術家のようなもので、これらはまあ特別の一階級とでも見^み做^なすよりほかに仕方がないのです。哲学

者とか科学者というものは直接世間の実生活に關係の遠い方面のみ研究しているのだから、世の中に氣に入ろうとしたつて氣に入れる訳でもなし、世の中でもこれらの人の態度いかんでその研究を買ったり買わなかつたりする事も極めて少ないには違ないけれども、ああいう種類の人が物好きに実験室へ入つて朝から晩まで仕事をしたり、または書齋に閉じ籠こもつて深い考に沈んだりして万事を等閑に附している有様を見ると、世の中にあれほど己のために行っているものはないだろうと思わずにはいられないくらいです。それから芸術家もそうです。こうもしたらもつと評判が好くなるだろう、ああもしたらまだ活計くらしむぎ向の助けになるだろうと傍はたの者から見ればいろいろ忠告のしたいところもあるが、本人はけ

つしてそんな作略さりやくはない、ただ自分の好きな時に好きなものを描いたり作ったりするだけである。もつとも当人がすでに人間であつて相応に物質的嗜欲しよくのあるのは無論だから多少世間と折合つて歩調を改める事がないでもないが、まあ大体から云うと自我中心で、極ごくく卑近の意味の道徳から云えばこれほどわがままのものはない、これほど道楽なものはないくらいです。すでに御話をした通りおよそ職業として成立するためには何か人のためにする、すなわち世の嗜好しこうに投ずると一般の御機嫌ごきげんを取るところがなければならぬのだが、本来から云うと道楽本位の科学者とか哲学者とかまた芸術家とかいうものはその立場からしてすでに職業の性質を失つていと云わなければならぬ。實際今の世で彼らは名前には職

業として存在するが実質の上ではほとんど職業として認められないほど割に合わない報酬を受けているのでこの辺の消息はよく分るでしょう。現に科学者哲学者などは直接世間と取引しては食つて行けないからたいいは政府の保護の下に大学教授とか何とかいう役になつてやつと露命をつないでいる。芸術家でも時に容れられず世から顧みられないで自然本位を押し通す人はずいぶん惨澹たる境遇に沈淪しているものが多いのです。御承知の大雅堂でも今でこそ大した画工であるがその当時毫も世間向の画をかかなかつたために生涯真葛が原の陋居に潜んでまるで乞食と同じ一生を送りました。仏蘭西のミレーも生きていた間は常に物質的の窮乏に苦しめられていました。またこれは個人の例

ではないが日本の昔に盛んであつた禅僧の修行などと云うものも
極端な自然本位の道楽生活であります。彼らは見けんしやう性しやうのため究
真のためすべてを抛なげうつて坐禅の工夫くふうをします。默然と坐している
事が何で人のためになりました。善い意味にも悪い意味にも世
間とは没交渉である点から見て彼ら禅僧は立派な道楽ものであり
ます。したがって彼らはその苦行難行に対して世間から何らの物
質的報酬を得ていません。麻の法衣を着て麦の飯を食つてあくま
で道を求めていました。要するに原理は簡単で、物質的に人のた
めにする分量が多ければ多いほど物質的に己のためになり、精神
的に己のためにすればするほど物質的には己の不為になるのであ
ります。

以上申し上げた科学者哲学者もしくは芸術家の類たぐいが職業として優ゆうに存在し得るかは疑問として、これは自己本位でなければどうい成功しないことだけは明かなようであります。なぜなればこれらが人のためにすると己というものは無くなってしまふからであります。ことに芸術家で己の無い芸術家は蟬せみの脱ぬげ殻がら同然で、ほとんど役に立たない。自分に氣の乗った作ができなくてただ人に迎えられるたい一心でやる仕事には自己という精神が籠こもるはずがない。すべてが借り物になって魂の宿る余地がなくなるばかりです。私は芸術家というほどのものでもないが、まあ文学上の述作をやっているから、やはりこの種類に属する人間と云つて差さ支えないでしょう。しかも何か書いて生活費を取つて食っている

のです。手短かに云えば文学を職業としているのです。けれども私が文学を職業とするのは、人のためにするすなわち己を捨てて世間の御機嫌ごきげんを取り得た結果として職業として見ると見るよりは、己のためにする結果すなわち自然なる芸術的心術の発現の結果が偶然人のためになつて、人の氣に入つただけの報酬が物質的に自分に反響して来たのだと見るのが本当だろうと思ひます。もしこれが天てんから人のためばかりの職業であつて、根本的に己を枉まげて始て存在し得る場合には、私は断然文学を止めなければならぬかも知れぬ。幸いにして私自身を本位にした趣味なり批判なりが、偶然にも諸君の氣に合つて、その氣に合つた人だけに読まれ、氣に合つた人だけから少なくとも物質的の報酬、（あるいは感謝で

も宜しい)を得つつ今日まで押して来たのである。いくら考えても偶然の結果である。この偶然が壊れた日にはどっち本位にするかというと、私は私を本位にしなければ作物が自分から見ても物にならない。私ばかりじゃない誰しも芸術家である以上はそう考えるでしょう。したがってこういう場合には、世間が芸術家を自分に引付けるよりも自分が芸術家に食付いて行くよりほかに仕様がなないのであります。食付いて行かなければそれまでという話である。芸術家とか学者とかいうものは、この点においてわがままのものであるが、そのわがままなために彼らの道において成功する。他の言葉で云うと、彼らにとっては道楽すなわち本職なのである。彼らは自分の好きな時、自分の好きなものでなければ、書きもし

なければ拵こしらえもしない。至つて横おうちやく着やくな道楽者であるがすでに性質上道楽本位の職業をしているのだからやむをえないのです。そういう人をして己を捨てなければ立ち行かぬように強しいたりまたは否いや応おうなしに天然を枉まげさせたりするのは、まずその人を殺すと同じ結果おちいに陥おちいるのです。私は新聞に関係がありますが、幸さいわいにして社主からしてモツと売れ口のよいような小説を書けとか、あるいはモツとたくさん書かなくちやいかんとか、そういう外圧的の注意を受けたことは今日までとんとありません。社の方では私に私本位の下に述作する事を大体の上で許してくれつつある。その代り月給も昇あげてくれないが、いくら月給を昇あげてくれてもこういう取扱を変じて万事営業本位だけで作物の性質や分量を指定

されてはそれこそ大いに困るのであります。私ばかりではないすべての芸術家科学者哲学者はみなそうだろうと思う。彼らは一も二もなく道楽本位に生活する人間だからである。大変わがままのようであるけれども、事実そうなのである。したがって恒産こうさんのない以上科学者でも哲学者でも政府の保護か個人の保護がなければまあ昔の禅僧ぐらいの生活を標準として暮さなければならぬはずである。直接世間を相手にする芸術家に至ってはもしその述作なり製作がどこか社会の一部に反響を起して、その反響が物質的報酬となつて現われて来ない以上は餓死がしするよりほかに仕方がない。己を枉げるといふ事と彼らの仕事とは全然妥協を許さない性質のものだからである。

私は職業の性質やら特色についてはじめに一言を費やし、開化の趨勢すうせいじょう上その社会に及ぼす影響を述べ、最後に職業と道楽の關係を説き、その末段に道楽的職業というような一種の変体のある事を御吹聴ごふいちように及んで私などの職業がどの点まで職業でどの点までが道楽であるかを諸君に大物理りかい会せしめたつもりであります。これでこの講演を終わります。

——明治四十四年八月明石において述——

青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年7月26日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

※底本で、表題に続いて配置されていた講演の日時と場所に関する情報は、ファイル末に地付きで置きました。

入力：柴田卓治

校正：大野晋

2000年1月6日公開

2004年2月27日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

道楽と職業

夏目漱石

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>